

歓喜の市

上

The background of the cover is a detailed illustration of a Japanese street scene. In the foreground, a large, dark wooden bridge structure dominates the upper half of the frame. Below the bridge, a street is visible with several figures. On the left, a person is bent over, possibly working with a bicycle or a cart. In the center, a person is walking. On the right, a group of people are walking towards the right. In the background, there are traditional Japanese buildings and a large, ornate structure, possibly a temple or a festival float. The overall style is that of a traditional Japanese woodblock print or a detailed illustration.

歓喜の市

立松和平

歡喜の市 上

一九八一年八月二〇日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 立松和平

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二〇五〇
郵便番号一〇〇

電話 東京 三三八二二八四二(出版部)
三三八二二七八一(販売部)

印刷所 大日本印刷株式会社

著者の誤解により検印は廃止します
落丁・乱丁の本はお取り替えします

目次

序章 勁い茎 五

第一章 六道の花 壹

第二章 森の修羅 二五

装画 遠藤彰子「街」より
装丁 田村義也

歡喜の市
上

序章
勁い
茎

両手で玄翁^{げんろう}を持ち、その重みのまま鉄床に打ちあてた。鈍い音がして掌の中に痺れがこもった。痺れる感触が心地よいのだった。ヘアクリームのような機械油のにおいにくるまれているのも気持ちよかった。時々芦原幸一は忙しそうな父親の幸造に玄翁をとりあげられて、鉄床のある場所から追われた。幸造は頭の上まで力一杯玄翁を振りあげ、ガンガンと耳の奥に突きささるほどの鋭い響きをたてて鉄板を打った。鮮かな青い火花が散った。思わず火花に顔を寄せた幸一は、危いぞおと幸造に怒鳴られた。汚れのひどい手ぬぐいで頭をしぼった幸造の顔に汗の粒がならび、頭を振るたび光の糸を引いて落ちた。油しみだらけの床板に碎け散った汗が、板に吸われず微小な水玉になって転げた。

カブト虫がもがいていた。爪で床を引っ掻く音が作業場中に聞こえるほど響いていた。足が一本糸で結んであるので、虫は同じ場所でも周囲を描くばかりだった。糸の一方の端は床板の裂目にはさんであつた。たまに幸一は糸を引いたり指で突ついたりしてカブト虫をからかった。昨夜作業場に飛んできたのだ。嘗めるように裸電球にまわりついていたのを、幸造がつかまえておいたのだった。元気

なカブト虫の身体は艶々していた。

曇ガラスのドアを開けて背をこごめ、よろめくように男がはいってきた。床板がしない、釘の頭が浮いた。幸一は父の背中にまわってから男を見つめた。丸首シャツに兵隊ズボンをはいた土肥泰次だった。地下足袋の先に穴があき、泥のたまった親指の爪が見えていた。土肥は背中から少しずつ倒れて担いでいた荷物をおろし、ふうっと大きく息をついた。そこは駄目だよと幸一は咄嗟に大声で叫んだが、遅かった。糸を引くと小枝のような足が一本結ばれていた。熱いものが胸から喉元にあふれてきた。

「こんなことで男がめそめそすんじゃないねえ」

幸造が強い声でいって幸一の手から糸をとり、虫の足を引き千切った。幸造はいいんだよと土肥に愛想をいって糸をポケットにいれた。土肥は興味もなさそうな顔をして幸造を見ていた。土肥の肩にくらいこんでいる荒縄を幸造がはずしてやった。シャツの肩が皺寄り、薄く血が滲んでいた。荒縄は濡れて黄色くなり、シャツにも汗のしみがひろがって背中の色が見えた。幸造は奥の部屋からでてきた妻のミキ子に眼で合図を送り、開け放したままのドアからミキ子が外に走りでていくのを待っていた。

「今年一番の暑さになっちゃったなあ。汽車は蒸風呂だったんべ。立ちっぱなしけ」

「本線はまだいいさ。どんなに混んでたって、荷を置けば、その上に坐ってこられっからな」気が緩んだとたん汗がでてきたとばかり、土肥は腰にさがっている手ぬぐいでくりかえし顔を拭いた。髪も不精髭も張りをなくし、風呂からあがったばかりのようだ。古手ぬぐいも小さく濡れそぼった。「だ

けど省線はつらいわ。この荷じゃ、車両の奥にはいつたらでられなくなっちまう。人口の手すりにつかまって、荷物はまるつきり外にでてる。曲がると振り落とされそうになる。命がけだんべな」

「荷はどうかね」

幸造が扇風機を土肥にむけた。部品を寄せ集めて幸造がつくった扇風機で、コマのとんだ映画のような動き方をして首を振った。

「上物さ。東芝の工場の焼跡が整理されたんだ。いろんなブツが出て、よりどり見どりさ。人手があればいくらでも買えたなあ。さすがの俺でも、二個担ぐのがやつとだからなあ。三個だと腰ぬかすべ」

土肥は扇風機にむかって口を開き、喉の奥まで風をいれていた。

「俺だったら一個でへこたれるさ。食い物がいいせいだろうけど、泰さんの馬力は天下一品だな」

いいながら幸造は荒縄で巻かれた席の包みをほどこきはじめた。焼け焦げたモーターが二個床にならんだ。土肥が東京や川崎や横浜のブローカーから買ってきたモーターを、幸造が錆を落としコイルを巻きかえエナメル塗装して再生するのだ。農家の脱穀や揚水に必要なためモーターはとぶように売れた。予約注文が先までつまっていたが、幸造一人ではいくら夜なべ仕事しても一台を仕上げるのに二日はかかった。土肥は一週間に二度東京に通い、ほかの日は自分だけの事業をやっていた。

ミキ子がガラス器のかき水をアルミ盆にのせてきた。向かいのツバメ食堂から持ってきたのだ。最初にガラス器をつかんだ土肥が、おっ、義姉さん、何よりだね、と声をはずませた。奥の部屋の敷居に腰かけた母親のミキ子に呼ばれて、幸一は隣にすわった。こぼすとまた大騒ぎすんだからね、とミ

キ子が尖った氷を掌でつぶした。氷は山から丘になり、指のあとがついた。莓味の赤いシロップがかかってた。甘いところは後まわしに、白い雪のような氷を幸一はアルミのスプーンで掘っては口に運んだ。口の中に風が吹いた感じがした。氷が半分くらいになると、ほらとミキ子がスプーンでひとすくいふたすくい自分の分の真赤なところを幸一の氷の上にのせた。幸一はおしむようにして氷を少しづつ舌にのせた。床の席にすわっていた土肥が顎を上にもつけて最後の氷水を飲んだ。不精髭に囲まれた唇が紅を塗ったように仄赤くなった。その唇が動いた。

「やっと人心地ついたぜや」

「泰さん、東京はいいでしょう」ミキ子が幸一の口のまわりを前掛で拭いた。「クニ子からも解放されるし。女が知らない楽しいことがあるんでしょう」

「映画ぐらい見てえと思うけど、荷物が荷物だからどうしようもねえや。動物園はちょっとのぞいたことあるけどな。モーター担いで汗だくになって猿の尻見ても、くたびれ損だわ」

「猿の尻かあ」幸造がくつくつと声を短く切って笑い、頭の手ぬぐいを取り目蓋をぬぐった。「俺も今度担ぎにいつてくるかな」

すぐにミキ子が疳高く声を重ねた。

「あんたみたいな瘦っぽちじゃ汽車賃も稼げないわよ。この前も泰さんが二個担ぐのに、あんたは小型を一個だったじゃないの。東京いきたいんでしょう。ストリップ見たいんでしょう」

「泰さん、そんなの東京にあったか」

幸造は真面目な顔をして土肥に顎をしゃくった。土肥はにやにやしながら顔を横に振った。黄色い

歯が齒茎まで見えた。そうそうと土肥は胸にさがった汚れた頭陀袋から新聞紙包みをだした。ほかにもまだいろんなものはいっている様子だった。

「闇市で買ってきたんだ。葬式饅頭みたいにつかいところが氣にいつてな。食いでがあるさ。五個あるから、二個おいとくべ」

あらまあと大声をだすやミキ子は奥の部屋にいき、皿を持ってきた。餡と黒砂糖の甘ったるいにおいがした。土肥が柔らかく揉みほぐすようにして新聞紙を開き、コロッケのような形と色の饅頭を二個皿にのせた。見ようと伸びあがった幸一は、母親に頭を押さえつけられた。土肥はいかにも大切そうに新聞紙包みを頭陀袋に戻した。袋は石でもいれたようなゴツゴツしたふくらみ方をしていた。母親に指で押された頭の皮膚から痛みがゆっくりひろがってくるのを幸一は感じていた。

ツバメ食堂の娘が氷の器をとりきた。お客さんがいっぱいきて、容れ物が足りなくなっちゃつて、と娘は自慢するふうない方をした。ミキ子が払う硬貨の澄んだ音がした。盆を持って危っかしく歩く娘のふくらはぎが白かった。ドアからでるや、陽を受けた娘の身体の線が黄色いワンピースの中に透けた。ヒュウツと土肥が口笛を吹き、幸造にむきなおっていった。

「東京ではもうビルがどんどん建ってるぜや。闇屋だつて商売換えするやつがでてきたらしいな」

「モーター屋も駄目かな」焦げたモーターを雑巾で拭いていた幸造が手をとめ、心細げな眼を土肥にむけた。「工場が動きだしたら暴落だな。中古の看板掲げなくちゃなんねえもんな。旨味はねえや」

「まだまだやれるさ。注文が間にあわねえなんだんべ。職人使つて生産あげても俺はいいと思うけどな。強氣でいくべ」

「泰さんが担ぎ屋やってくれるうちは商売できるさ」

幸造はモーターの上に屈まっ一本ずつネジをとっていた。外枠をはずすと、錆の粉がこぼれてきた。窓辺の陽の中で埃が輝いた。

「ひでえぞ、こいつは」

こぼれつづけて足元に山をつくっていく乾いた錆の粉に、幸造は悲鳴に近い声をあげた。思わず幸一はミキ子のスカートの膝に顔を埋めた。自分の息で顔に湿った膜ができた。土肥の自信に満ちた徹りのいい声がした。

「ローターがちよつと腐ってるだけだんべ。安い出物なんだからこんなもんさ。幸造さんの腕なら何とかなるさ」

「部品があるかな」

幸造は焦った手つきでもう一個のモーターのネジを回していた。同じような黒い粉がでてきた。こんなもんさとまた土肥がいった。もともと闇屋がどっかからかっばらってくるんだからな。仕事場はもうもうたる埃に包まれていた。丸首シャツの幸造は棒立ちになったまましきりに額の汗を拭いた。遠くでセルモーターの音がした。エンジンがかからないのか、砂をこするような音がくりかえされた。

「やってみるべ」

幸造は自分にいい聞かせるように小声をだし、ゴム長靴を脱いで部屋にあがった。足の指が白っぽくふやけていた。湿った音で防犯ベルが短く鳴った。金庫になっている簞笥の上の引出しを開けたのだ。ミキ子はシュロ箒で床の粉を掃き集めていた。箒に追われて土肥は壁際まで後退っていき、椅子

がわりに置いてあるリング箱に脚を開いてかけた。幸一は窓辺に頬杖ついて外を見た。睡いような陽光があふれていた。動くものは、向かいのツバメ食堂の店先で腕を回転させて氷をかいている娘だけだ。ガラス器に純白の尖った山ができた。削りすぎたのか娘は思案げにじつと氷の山を見つめていたが、あたりに誰もいないのを確かめ、いきなり先端に噛みついた。齧ったあとを指でならして赤いシロップをかけた。盆にのせて運んでいく娘の黄色いワンピースの後姿が、埃をかぶったようになって網戸の向こうに見えなくなった。

幸造がいかにもおしそくに両手で千円札を何枚かひろげ、賞状でも渡す手つきで頭を下げた。土肥はバンドにしばった紐を引いて財布をズボンのポケットからだした。財布のふくらみを見せびらかし硬貨の音をたててから千円札をていねいにしまった。猫がトタン屋根を歩く爪の音がした。

「あら帰ってたんだね。外にオートバイ止まってたからまだ東京かと思ったわ」

はずんだ声をした。ミキ子の妹のクニ子が、まるで光の中から今生まれたとでもいうようにいきなりドアのところに立った。濡れそぼって小さくなったハンカチを掌に握っていた。洗いざらしの水玉模様の簡単服を着ていた。身体にあわずかぶかだった。ミキ子が妹に負けず高い声をあげた。

「クニちゃんたら、雨ん中歩いてきたみたいにびっしりじゃないのお」

「あたし、汗っかきだから」

「何だ、お前」

土肥が短く刈込んだ頭に手をやって声を低めた。唇の端から白い泡粒がでてきた。クニ子は両の脇の下をぬぐったハンカチを鼻にあてて顔をしかめた。

「いっしょに帰ろうと思ってさ」

「わざわざバス賃使ってできたんかよ」

「バス賃なんて何でもないじゃないの。あんたにお金持たせたら、すぐ鬩鶏に使っちゃうんだから。貯金しろってあたしにはケチさせといてさ。鶏の喧嘩のどこがおもしろいんだか」

「馬鹿」土肥は音をたてて唾をのみこんだ。喉仏が動いた。「男のやることに女がいちいち口を挟むんじゃねえんだよ」

「口挟まなかったら何すつかわかんないくせに。ずいぶん泣かされたもんねえ」

「家に帰ってからやりなさいよ。夫婦喧嘩は犬もくわないっていうよお」

ミキ子がわざとらしい剽軽な声をだした。幸一は床板の継目にはいった鉄錆の粉を釘で掘っていた。真鍮のネジやコイルの切れ端などがでてきた。コッコッコッと幸一は口の中で鶏の声を真似てみた。

父と土肥に連れられて鬩鶏を見にいったことがあった。トタンや板切れを打ちつけ迷路のようになつた大きなバラックが駅の前にひろがっていた。水流の跡が刻まれた土の路地を父に手を引かれて歩いた。地面にはサイダーの王冠が踏まれて埋まっていた。溝板は腐どぶいたっていて危いから乗るなといわれた。陽光や風雨に蝕まれて今にも崩れそうな二階建の密集した片隅に一摺みの空地があり、その中央に穴だらけのトタン屋根のかかった掘抜井戸があった。井戸の庇の陰に大人たちの背中がたくさん集まっていた。幸一は父に肩車してもらい大人たちの頭越しに中を覗いた。リング箱を壊した板で四角いリングがつくってあり、艶やかな黒い羽の軍鶏しやもが二羽鋭く羽撃きあっていた。二羽は顔を突上げ、懸命に背の高さを競いあっているように見えた。小羽が散った。軍鶏の悲鳴も男たちの歓声に消された。